『科学南洋』 1巻1号（1938）- 5巻2号（1943),

パラオ熱帯生物研究所

第二次大戦の戦前から戦中にかかる 1934～1943 年の期間、現在のミクロネシア諸島の一つに、「パラオ熱帯生物研究所」という日本の研究所がありました。

当時サンゴ礁は国際的関心の高い研究テーマで、太平洋地域の研究者が集う「太平洋学術会議」では、研究所設置の提案が合意を得たものの、世界恐慌によって計画が頓挫したまま、未開拓の領域となっていました。そうした状況のもと、東北帝大・生物学教室の畑井新喜司教授の働きかけにより、世界で最初の、サンゴ礁研究を中心とした研究所が実現されました。

研究所では『Palao Tropical Biological Station Studies』（以下、『Palao』と省略）と『科学南洋』の 2 誌が発行されていました。英文の学術雑誌だった『Palao』は各国の熱帯研究機関に送付され、多くの反響を得ました。一方の『科学南洋』は『Palao』論文の抄録や、旅行記、近況報告などを日本語で掲載する「研究所だより」的性質を持つものでしたが、それも戦後アメリカによりすべて英訳され、各国で読まれたそうです。

サンゴ礁についての基礎的な研究が国際的に高く評価されていたパラオ熱帯生物研究所でしたが、戦争が長引く中で徐々に南方資源の利用についての調査などが増え、設立から 9 年後の 1943 年、ついに閉鎖されて研究員たちは各地の軍務に赴任し、研究に用いた機材や資料は終戦で散逸したということです。

参考文献：

「パラオ熱帯生物研究所」板野徹，化学史研究 vol.22（1995）

「パラオ熱帯生物研究所と新しく設立されるパラオ国際サンゴ礁センター」大森信，みどりいし vol.10（1999）

「かつて在りしパラオ熱帯生物研究所」元田茂，太平洋学会学会誌 vol.12（1981）

■畑井新喜司　はたい・しんきし（1876-1963）

（肖像画：東北大学総合学術博物館 HP より）

動物生理学者。青森生まれ。東北学院卒。1899 年に渡米してシカゴ大学で学び、ペンシルベニア大学・ウィスター研究所の教授となる。1921 年に帰国し、東北帝大・理学部教授として生物学教室の創設にあたり、オーストリアの植物学者ハンス・モーリッシュを講師として招く。浅虫臨海研究所の創設時には所長を務める。のちに東京家政大学長となる。

大学は教わるところではなく、自分で考え創作する場として、常に若い研究者を激励していた。

「それは君、大変おもしろい。君、ひとつやってみたまえ」が口癖だったという。

■パラオ熱帯生物研究所（1934-1943）

（写真：『太平洋学会学会誌』vol.12, 1981.10 より）

日本が南洋諸島の委任統治を担当していた 1934 年、東北帝大・畑井新喜司教授の働きかけにより、日本学術振興会の下に設立。世界で最初の長期間にわたるサンゴ礁研究に取り組んだ。特に川口四郎氏の研究は、サンゴ礁が藻類との共生により栄養を得て生活していることを初めて発見した。戦争の激化に伴い、1943 年に研究所は閉鎖され、海軍総合研究所に編入された。

■太平洋学術会議

太平洋地域の科学者が集まり学術研究の国際協調を象徴する機関で、1920 年にハワイで開催された”Pan-Pacific Science Conference”に端を発する。第一次世界大戦後は、科学者が連帯して研究と平和を促進する目的を持った国際組織が数多く作られた。

■パラオ共和国

ミクロネシアの最西端、フィリピンの東 820 キロメートルに位置する島国。屋久島とほぼ同じ大きさの国土 459 平方キロメートルを有する。かつて日本が統治していた南洋群島の一部で、日本統治時代は南洋庁が置かれていた（1922～1945）。人口 2 万 2000（2006 年推計）。アメリカ領のグアム、サイパンに次ぐリゾート地として日本でも知名度が上がっている。